風雲の果て

今井 祐一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風雲の果て

【Ｎコード】

Ｎ１３５２Ｃ

【作者名】

今井　祐一

【あらすじ】

終わりを知らぬ戦雲。舞い降りた一陣の風。彼が目指すのは、復讐か、栄光か。歴史に忘れ去られたものが甦るとき、新たな嵐がまきおこる。果てしない戦乱の先にあるものとは…「風」の遺児・風彪（ふうひゅう）と、彼をとりまく世界の物語

第1話：傭兵の日常－1：目覚

夢を、見ていた。
懐かしい匂いのする草原を駆けている。
鞍(くら)もなしに、栗毛の駿馬(しゅんめ)にまたがっていた。
なぜか、どこかで会ったことがあるような気がする。
呼吸に乱れはない。景色が後ろへ飛んでゆく。まるで風になったようだ。
ふと横を向くと、そこには自分と同じ栗毛にまたがった父の姿があった。
父と並んで黄金に輝く草原を、あてどもなく走り続ける。
誰もいない。何も聞こえない。蹄(ひずめ)が大地をけりつける音も、草がゆれるさわさわという音も、すべてがないもののようだ。
ただ、過ぎ去ってゆく風の響きだけが、遠くから聞こえてくるようであった。
父は、何もいわず、ただ前を見つめている。腰に目をやれば、そこには自分がかつてあこがれた白銀の長剣があった。
弓はなかった。幼いころ、何よりも自分を夢中にさせた、あの、燕の舞う弓。
なにげなく自分の背に手をやると、弓はそこにあった。古くから伝わる一族の誇り、それは自身の手の中で、静かな輝きを放っていた。
急に、あたりが暗くなった。
風がざわついている。猛っている。
穏やかに波うつ金色の海は、蒼(あお)く澄みわたる空は、荒れ狂う玄(くろ)い雲にとってかわられた。
馬が、馬が進まない。高くいなないて、さお立ちになる。
父の影が、遠のいていく。幽(くら)い、天と地の狭間に呑み込まれてゆく。

父を止めねば、そう思った。しかし、声が出ない。焦れば焦るほど、父の姿は遠ざかってゆく。自分の体が、思うように動かない。
風は、ますます強く吹きつけてくる。
突然、目の前が真っ白になった。轟音(ごうおん)が、耳を貫いた。その中に、風彪(ふうひゅう)は確かに父の声を聞いた。
「思うさま、駆けよ」

目がさめた。白い雲の隙間からさしこむ朝日がまぶしい。自分がいつもの床ではなく、寝台で眠っていたのに気がついた。
思えば、もといたところを出て三週間が過ぎている。それが、もう三週間なのか、まだ三週間なのかはよくわからなかった。
体を起こしてとなりの寝台をのぞくと、もう空になっていた。外からは木の棒を打ち合う乾いた音が響いてくる。情けないことに、ずいぶんと寝坊してしまったらしい。身支度を整えると階下へ下りた。
「よう、風彪。お前にしちゃあ遅かったな。お前みたいな奴でも疲れることがあるのか」
食堂に入るとレルガが声をかけてきた。
レルガは一見、とっつきにくく見える。燃えるように赤い髪、額や頬に残る傷跡、鋭い目つき。背丈はそれほど高くはないが、がっしりとした体つきが精悍(せいかん)な顔つきとあいまって、非常な威圧感を受ける。
しかし話をしてみれば外見から受ける印象とはまるで違う。温和で面倒見がいい。
学問をしたこともあるようで、字はもちろん読めるうえ、知識も豊富だ。しかもそれを経験によって磨き、見事に自分のものとしている。
食堂は、もう日が昇ってだいぶ経つからか、ほとんど人影はない。
レルガは主人といろいろと世間話をしていた。以前にも立ち寄っ

たことがあるらしい。顔なじみというわけだ。彼の向かいに座って主人に遅い朝食を頼んだ。

「カルマ殿は今日も王宮か」

「あぁ、そうだ」

カルマ＝カフカスは大陸中に大商家として知られているカフカス一族の一人で、自分たちの雇い主である。

「ご苦労なことだ」

自分たちはこの大陸を二つに分かつ山脈を越えて、オストマルク王家に納める品を運んできた。道の途中で山賊に遭い、王家からつけられていた護衛の半分近くと、荷の大部分を失ってしまった。

カルマが雇った傭兵たちの奮戦でどうにか全滅を免れオストマルクにたどりついたのだが、王家はねぎらいの言葉をかけるどころか兵士を失ったことを責め、賠償金までもとろうとしているという。

「礼も何もあったものではないな」

オストマルク王国は帝国に服属する辺境の自治都市である。大陸を南北に貫く山脈、央岳の西側のふもとにある。ふもととは言うものののそれはいくらか土地が平坦に見えるからで、実際には海抜高度も高く、周りに生える木は多くが広葉樹や針葉樹である。

山脈を背にして見下ろすと、つまり西を向いてこのオストマルクの町を眺めると、町の中心からやや右に川が一つ流れている。レーヌ川である。雪どけ水を運ぶその流れは春先の陽光を浴びて透きとおっている。

川のすぐとなりには川の水をひいた堀に囲まれた城がある。歪（ゆが）んだ四角形をした城壁はところどころが苔（こけ）むしていて青くなっている。それがこの城の古さと都市の長きに渡る平和とを無言のうちに示している。

その左右に帯のような形で市街地が広がっている。市街地とは言うもののもともとは扇端でわきでる水を利用した農村であった。地味はやせてもおらず、水は豊富にあるから農地としては及第点である。難点は冬の寒さであったがこれは農民たちのたゆまぬ

努力によって克服された。
大陸西部でさいはてとされたオストマルクだが、山脈を越えての東西交易がはじまると、西側の入口としておおいに栄えるようになった。ひっきりなしに旅人や商人たちがここを通って東へ、あるいは西へ歩みを進めてゆく。自然とそこに富が集まり、文化がはぐくまれていった。
それは繁栄とともに別なものをも、もたらした。それまで遠く離れた平原で覇を争っていた者たちが、己の富貴を望む者たちが、この町を様々な形で手に入れようとした。ある者はこの地を領し、ある者はその身一つで莫大な財を築きあげた。オストマルク王家もそうしてはじまった。
この地はオストマルクが支配するまでナルイムと呼ばれていた。今でもそう呼ぶ者もある。オストマルクは二百年ほど前に独立した自由都市であったナルイムの公職を独占、市長の座を世襲することを市民に認めさせて、後に王を名乗るようになった。遠祖をたどれば一市民でしかない。
もちろん今は誰もそんなことを覚えていない。自分たちは最初から王家として生まれてきたものと思っている。そうすればその態度は自然と高慢なものになる。
加えて現在、オストマルクは帝国の自治都市である。多額の税を収めることで直接に支配されることを免れている。踏みこんだいい方をするならば、金で自由を購(あがな)っているのだ。
それでも浪費をしなければ、いかなる不自由もなく政事を行っていけるだけの利潤はあるのだが、財とはあればあるだけ欲しくなるものである。通常の税や貢納だけでは満足できなくなってゆく。しかも相手は生活の苦しい農民ではない。王侯将相の次か、場合によってはそれ以上に富裕な商人たちである。それらはいわば、汲(く)めども汲めども尽きることを知らない泉のようなものだ。尽きぬとあれば汲めるだけ汲みたくなる。それが今の王家の姿であった。
「これでよく倒れぬものだ」

風彪は、国家とは民がある一定の秩序を保って生活してゆくための一つの仕組みに過ぎないと思っている。王とか領主とかいうものはその仕組みにくみこまれた歯車でしかない。私利私欲のために国家を独占するならば、それは盗賊となんら変わらないとも思う。

それに国の主権は表むき王家や貴族らが握っているように見えても、土台は民衆にあることも知っている。遥かに続いてきた時の流れのうちには民に見放され、民によって滅ぼされた国があることも知っている。

だいたい王や貴族は、民衆が自らのそれらの君臨することを認めてはじめて王や貴族たりうるのである。民の支持を失うことは滅びに等しい。そのことは今も昔も変わらぬことである。

「ところがそうやってしぼられるのは金持ちだけさ。ここに住んでる普通の連中にはなかなか寛大なようだからな。結局いつも馬鹿を見るのはよそものだろうよ」

「なるほどな」

それでも風彪はどこか腑(ふ)におちぬものを感じる。奪っても困らないものからは不条理に奪ってもいいのか。

――けしからんやり方だ。

顔に出たらしい。

「でもな、風彪。枠の中だけで商売してる奴なんざ一人もいねぇよ。少なくとも一生困らんだけ稼いだ連中の中にはな」

そう聞くとますます腹が立った。それではこの町は不善のかたまりではないか。

「あんまり目くじら立てたって仕方ねぇ。そういうもんなんだよ」

「そういうもの、か」

レルガは自分と比べてはるかに広い世界を生きている。風彪の知識は閉鎖された空間の中で、書物から得たものだ。書物は、遠いか近いかの差はあっても、過去の産物であることにかわりはない。それは死んでいるといってもいい。それを活かすのは、生きた自分の経験である。その経験が、風彪には圧倒的に不足であった。

人の世である。きれいごとばかり並べ立てても仕方ないのは分かっているつもりではある。しかし、それだけでは納得しきれないこともあった。

「そんなに考えこむな。暗い顔したっていいことなんざありゃしねぇぞ」

レルガが笑いかけてくる。それも、確かに一つの真理だ。

第1話－2：赤と白

朝食を終えて立ちあがる。そこでふと足りないものに気がついた。

「林昭(りんしょう)はどうした」

この間襲撃を受けた際に林昭は足に傷を負った。そのたぐいまれなる天稟(てんぴん)のおかげで致命傷にはならなかったが、三日ほどは歩くこともままならなかった。あれから一週間たってようやく自分の足で歩けるようになったくらいである。

そもそも彼がまともに武術と呼ばれるものを学びはじめてから一ヶ月も経っていない。

襲われたとき、風彪(ふうひゅう)は事情があって林昭の近くにはいられなかった。林昭は乱戦の中で常にレルガのとなりにいたらしい。おそらくレルガの配慮であろう。まともに戦えば全滅も免れぬ戦であったが、味方の五倍近い数を相手にレルガは林昭をかばいながら戦ってくれたらしい。

乱戦により、五十人ほどいた味方のうち半数は斃(たお)された。その半数に林昭は含まれていなかった。

戦のただなかに身をおいて正気を保つのは極めて難しい。はじめてで、しかも圧倒的に不利となればなおさらである。そんなとき、人は狂気おかされて死んでゆくか、恐れのあまり何もできずに斬られてゆくかのどちらかに決まっている。

ところが林昭はそのどちらでもなかった。次々に襲いくる敵兵の斬撃を流し、かわし、あしらい、レルガや他の味方とともに、乱戦を生きのびたのである。傷を負ったとはいえ、それでも常人には到底できぬ業(わざ)である。

もともと押しかけるような形で弟子入りした林昭ではあったが、彼の中に天賦(てんぷ)の才が眠っており、呑みこみも早く機転もきき、何より心の底から風彪を慕っていることが感じられて、放っておけないと思うのであった。

「このあたりに知り合いがいるという話は聞いていないが」
レルガはなにやら苦笑していう。
「奴なら裏だろうぜ」
この苦笑の意味が風彪には今ひとつよくわからない。自然、見下されたように感じられておもしろくない。
「そうか」
椀の飯をかきこんで立ち上がる。自分以外の人間がつくったものを食べるのもずいぶんと久しぶりだった。
宿の裏へでた。広場になっていて宿の勝手口のすぐそばに井戸がある。
旅人たちの馬をあずかる小屋もある。今はカルマの荷を曳(ひ)いてきた馬たちが入っていた。
そこで棒をとって打ち合う青年が二人。板壁によりかかって、けだるげな視線を向けている青年が一人。
白い衣と赤い衣があざやかに舞う。一方が踏み込むと他方が飛びすさってかわす。
白衣が赤衣を巻き込むように趨(はし)る。
赤はこの横撃を受け流すとその流れのまま下から突き上げた。
白は横へ流れてかわし、大上段に打ちかかった。
赤もこれに応えて真っ向から突きかかる。
かっ、と乾いた音が響きわたる。絡み合った棒はぴたりと動かなくなった。
と、見えた次の瞬間、白衣がはためいて飛び退いた。その右手から伸びた棒が足下を鋭く払う。
重心をくずされて前のめりになった身体はこれを受けきれず、どう、と音をたてて横転した。
「勝負あり」
見ていた青年が声をあげた。その響きにはかなり疲労の色が混じっている。
「もうそろそろいいでしょう、郭方さん、呂盛さん」

郭方は今しがた勝ちをえた白衣の青年である。もとは行商だったというが、あるとき嵐にあって乗っていた船が転覆、商売道具を失って破産してしまったという。それ以来、カルマの世話になっている。

一方負けた呂盛は天を仰いでいる。赤を好んで身につける彼は由緒正しい薬師の生まれだが、古の英雄にあこがれて武術を学び、武名をあげることを夢見ている。

最初に風彪とレルガに気づいたのは林昭だった。

「あっ、師匠」

助かったといわんばかりに駆けよってきた。まだ足の怪我は治りきっていないようで、左足の運びがぎこちない。もとのとおり動けるようになるまでにはまだ一週間ほどかかりそうだ。

「林昭、もしやお前、起きてからずっとここにいたのか」

なんとなくそんな気がした。

「あの、実は――」

林昭は朝起きてからいままでのことを話してくれた。

第1話－2：赤と白（後書き）

第1話－3：薬師

早朝、まだ日の出まで一、二刻ほどあろうかという時間。林昭(りんしょう)は無性に喉が乾いて身を起こした。

部屋の水差しは空になってしまっていたので階下へ下りてみた。

宿のものは起き出して掃除や食事の準備をはじめていた。

水は裏手の井戸からくんでいるということで、くんできましょうという主人について勝手口を出る。

井戸からくみ上げたばかりの水の冷たさが心地よい。水が最もうまい瞬間である。

喉を潤し、主人が水を運ぶのを手伝って、もう一眠りしようと階段に足をかけると上から下りてくるものがあった。

「おはようございます」

赤い衣、呂盛(りょせい)だ。薬師だという。林昭の足を看てくれているのは彼である。

「おはよう、林昭。早いね。足はもう大丈夫かい」

「はい、歩くぶんには問題ないです」

「そう。じゃ、これからはできるだけ動かして。一週間もすればもと通りになるよ」

それを聞いて安心した。

怪我をしていると風彪(ふうひゅう)もまわりの人間も自分のことを気遣ってくれるが、それがどうも林昭には重荷であった。

治ればまた稽古をつけてもらえる。そのことも林昭の心を浮きたたせた。

かなり痛みを伴う稽古であり、たぶんはた目にはとても稽古には見えないようなものではあったが、どんなに打ち据えられても林昭にとっては風彪と向かいあう時間が何ものにもまして、大事なものだった。

それはただ、強くなりたいという思いからくるのではないらしか

ったが、それが何なのかは自分にもよく分からなかった。
「ところで林昭、もう部屋に戻るかい」
「そうですけど」
「今から薬を作るけど、せっかくだから簡単なのを一つ二つ教えてあげようか」
そういって腰に下げた袋をぽんぽんとたたいてみせた。
薬師に直接薬の作り方を教えてもらえる、これは非常に稀有な機会である。林昭はこの申し出に飛びついた。
なぜ稀有かといえば、普通薬師に限らず、酒屋や鍛冶屋のように材料の種類や割合がものをいう業種の人々はなかなかそういったことを人にはあかしてくれないからである。それが彼らの商売道具なのだ。
それをいってみると呂盛は笑い飛ばした。
「薬は、必要なときに必要な場所にあってこそ意味があるんだ。だからほんとのことを言えばみんながみんな薬師になればいい。でも中にはしっかり勉強しないと作れないような薬もある。わたしたちの仕事はそういう薬を作ることなのさ。簡単なものならいくらでも教えてあげる」
「でも、そうすると他の薬師たちに恨まれませんか」
また呂盛は笑った。
「そんなことで怒るようなやつは薬師としての腕に自信のない連中さ。誰にでも作れるような薬だけで商売しようったってそうはいかない」
なるほど、呂盛は根っからの薬師だ。
薬は人の痛みを取り除き、時には命を救うものなのだ。生活の糧には違いないとしても、呂盛の中ではそれ以上に薬の本当の目的が優先される。そのために薬の作り方はみんなで共有しなくてはならないというのだ。
林昭は素直に感心した。自分もこんな風に自分に誇りをもてる日がくるだろうか。

林昭は流賊だった。誇れるものなど何もない。一度落草してしまうと、かたぎの世界にもどるのは至難の業だ。特殊技能をもたない身ならなおさらだ。このままなすすべもなくのたれ死ぬだけなのかもしれないと思うこともあった。

風彪に出会ったのはそんなときだった。

あれからまだ一ヶ月もたたないのに、自分はずいぶん変わったと思う。何より自分の身にやましいものがなくなったことが、林昭にとっては一番嬉しかった。

作業は厨房でするのかと思ったらそうではないらしい。呂盛は裏へ出て井戸の前に陣取ると、腰に下げた袋から小さな椀やらすり鉢やらを取り出した。

「簡単なものならこれだけで十分作れるよ」

そういってきょとんとしていた林昭に、袋の中から今度はさまざまな植物をとりだして、

「これの根はすりつぶすと風邪に効くんだ。気をつけてみていればどこにでも生えているから、見つけたら摘んでおくんだ」

と、いいながらなにかの薬草を見せてくれたり、

「これはこっちを乾燥させたものなんだけど、こうして粉にしておいて、お湯に溶かして飲むと咳止めになるんだ」

といって実際にやって見せたりしてくれた。

椀は二つ合って、ひとつは練り薬なんかを作ったりする非加熱用の木でできているもの、もう一つは鉄製で煮たり煎じたりするのに使うものだという。それも実際に井戸から水を汲んで、宿の薪をかりて使ってみせてくれた。

「このあいだだいぶ使ってもうないからね、また一から作らなくちゃならないし、ちょうどいいんだよ」

このあいだ、というのは林昭が足に傷を負った山賊との戦闘のことである。

「あのときの薬って全部呂盛さんが作ってたんですか」

呂盛は微苦笑して肩をすぼめた。

「いや、馬車に積んであったのがほとんどだけど、怪我のひどかった人にはわたしのを使ったよ。あれだけ人数がいたらこれだけじゃ足らないさ」
そういってまた腰の袋を一つたたいた。
「でも僕は他の人に比べたらそんなにひどい怪我じゃなかったのに、あなたは自分の薬を使ってくださいませんでしたか」
一瞬だけ呂盛の瞳が揺らいだ。しかし彼はすぐにもとの顔に戻るとほんのわずかほほえんで、それからは無言で作業を続けた。
日がのぼり、あたりの薄暗さが少しずつ払われてゆく。そしてまた、徐々に町も目を覚ましはじめる。目を覚ましたこの生き物には、眠っているときとは比べ物にならないほどの活力があった。さっきまでの静けさが嘘のようだ。
にぎやかになってゆくまわりとは対照的に、林昭と呂盛はどこまでも静かだった。
そこへふらりと別の人影があらわれた。
「よう、呂盛。朝一番から仕事かい。ご苦労なこったな」
純白の戦袍(せんぽう)が朝日を受けて真白に輝いている。
「わたしはあなたほどひまな身分ではないのでね、残念ながら」
呂盛の口調が急に辛辣(しんらつ)になった。
「そういうなって」
「じゃあ手伝ってもらいましょうか」
郭方(かくほう)は大仰に肩をすくめて見せた。
「俺に勝ったら考えてやってもいいぜ」
そういって身の丈ほどの木の棒を差し出した。別の手にも同じような棒が握られている。
呂盛はそちらには目もくれず、火にかけたなべの中身を慎重にかき混ぜている。
郭方は、
「そうかい。そんなに俺と白黒つけるのが怖いのかい。情けねぇやつだぜ」

といってこちらに背を向けて歩き出した。その瞬間に、ほんの一瞬だが呂盛の手がぴくりと上がりかけたように林昭には見えた。

「そんじゃ、方天戟では天下一の使い手は俺ってことだな」

方天戟は呂盛と郭方の得物である。林昭は二人が方天戟を使う場面を直接見たわけではないが、戦闘のあった夜、二人とも方天戟を持って見回りをしていたのをなんとなく覚えていた。

槍の穂先の両側に半月形の刃を備えたものが方天戟である。槍による突きや払いのほかに斬る動作が可能であり、非常に汎用性が高い。

ところが先端部に重さがかたよってしまっているので扱いは非常に難しい。また、行える動作に幅があるということはそれらをみな使いこなすためには相当な鍛錬を積む必要があるということでもある。

そのため使い手も剣や槍といった一般的な武器に比べるとかなり少ない。そのためにちらりと見ただけではあったが、林昭の記憶にも残っていたものと思われる。

林昭はこの言葉に呂盛がどう反応するか気になってふっと顔を上げた。

呂盛がはじめて顔を上げて口を開いた。

「それは聞き捨てなりませんね」

穏やかな口調の底にぞっとするような冷気がひそんでいた。深い茶色をした瞳には燃え上がる闘気が映っている。呂盛は煮詰めていた薬草の汁を火からおろすと、その小さななべにふたをして立ち上がった。

「やっとやる気になったか」

郭方の顔は笑っている。しかしその目は呂盛と同じく誰にでもそれとわかる激しい闘志を宿していた。

第1話－4：試合

郭方が棒を投げてよこした。
二人は五歩ほどの距離をとって正対する。言葉はない。
林昭はふと上を見上げた。空が青い。真白な雲がところどころに浮いている。
それを見ながら、林昭は奇妙なことを思った。
この青空の下にはにぎやかな町がある。自分たちはその中にいる。この場所を一歩踏み出せばそこは東西が混じりあう坩堝（るつぼ）である。
坩堝の中は人であふれていて声は洪水のように飛び交っている。せまい坩堝の中でその波に呑みこまれずにいられる場所など存在しない。
それなのに、今この場所には一つとして声が存在しない。自分の鼓動が、二人の息遣いが、静寂の中と変わらぬ確かさをもって耳に響いてくるのだ。
それはまるでこの一角だけが切り離されて別の時間を生きているかのようだった。
林昭が空から目を戻しても二人はまだじっとにらみ合ったままだった。
お互いの一挙手一投足をも見逃すまいとするかのように目を凝らしている。見ていて息苦しくなるほどだ。
なにか、得体の知れないものが、周囲を満たしては引いてゆく。はじけた。
先に動いたのは呂盛のほうだった。
二歩の間を五歩で詰めると棒を躍らせて顔面へ突きをくれようとする。
郭方はこれを体をずらして避けようとした。すると棒は変化して足下へのびる。
白衣がひるがえって後ろへ下がろうとする、それと同時に郭方も

横に払って相手を牽制する。
呂盛はこれを受けながらさらに間を詰め懐に飛びこむ。右に左に棒をくりだして相手に間合いを取るいとまを与えない。ぐいぐい押してゆく。
相手のほうも懸命にこれをはじいて時折反撃を試みるが、立ち上がりに失った勢いを取り戻すには至らない。ますます押されて苦しくなってゆく。
林昭はこれを冷静に観察している。呂盛の動きは急激に見えて攻めは大振にならず、細かく小さく、それでいて力がこもっている。郭方はこれをうまく受け、軽快な足運びでかわしつづけているが矢つぎ早にくりだされる呂盛の攻撃を払いのけて攻勢に至るだけの余裕がない。
しだいに郭方の顔に焦りが見えはじめた。攻めに移らない限り勝ちはない。何とかきっかけをつくろうとするのだが、その心に体がついてこない。ますます追いつめられてゆく。
焦りがついに形となる。下がるのが一瞬だけ遅れた。かろうじて袈裟懸けにふってくる棒は受け止めたが、次の払いはまともに胴にはいった。
ぐっ、と声をたてて郭方が崩れ落ちた。
「気はすみましたか。約束ですから手伝ってもらいますよ」
そういって呂盛は郭方の足下に、とん、と棒をついた。
「へっ、一本とっただけで勝った気になるなよ。負けが怖くなかったらもう一本勝負しな」
減らず口をきいて立ち上がる。背を向けて井戸のほうへもどろうとした呂盛は振り返らずに、肩をすくめてつぶやいた。
「負け犬の遠吠えはよして、早く手伝ってください。このあいだの戦のせいで薬がいろいろと足りなくなってるんですから」
「勝ち逃げったってそうはいかねぇ、もう一本とったら手伝ってやる」
呂盛が振り返った。赤い衣が太陽の光を受けてよりいっそう燃え

上がる。
「その言葉に嘘はありませんね」
「きくだけ野暮だぜ」
完全に林昭は一人取り残されてしまった。二人はまた押し黙って対峙している。
日もすっかり地平線から顔を出して春の陽光をふりまいている。
そういえば風彪はまだ起きていないのだろうか。いつもの師匠ならば日の昇るころには起きだしているのに今日はまだ声を聞いていない。まだ寝ているのか、それともまさかとは思うがなにかあったのか。
――一度部屋に戻ろう。
くるりと井戸に背を向けて宿の勝手口の、取っ手に手をかけた。
「ちょっと待ちな」
後ろから声が飛んできた。
「林昭だったな、頼みがあるんだ。きいてくれねぇかな」
あまりいい予感はしない。郭方の微笑みが怖い。できることなら立ち去りたいところだったが万全ではない足ではそういうわけにもいかない。
「なんでしょうか」
「なに、そう怖がるなって。俺とあいつの試合を見てて欲しいんだ。あいつがいかさましねぇようにな」
「それはこちらの台詞ですよ」
呂盛もこちらへ歩み寄ってきた。自然と林昭は二人にはさまれる形になる。
「すぐに片付くからそれまでここにいてもらってもいいかい。まださっきの続きが残ってるからね」
眼光が鋭くなった。これでは選択肢がない。しぶしぶながら林昭はその場に残った。
二本目は郭方の勝ちに終わった。さきの反省から十分に間合いを取り、余裕を持って攻撃をかわし、いらだつ呂盛の大振を誘ってそ

の隙を逃さず最後は突きでしとめた。
こうなると呂盛も黙ってはいない。三本目は呂盛がとった。
そして二人は一進一退を続け、林昭を立会人として巻き込んで、
太陽が中天にさしかかるまで戦い続けたのであった。

第1話－5：風の片鱗

「なるほど、俺の弟子をずいぶんかわいがってくれたようだな」

――いけねぇ。

レルガは焦った。風彪（ふうひゅう）を怒らせるのはまずい。カルマが雇っている傭兵のうちで首席に座っている自分を、一合もせずに屈伏させてしまうほどの使い手である。呂盛も郭方も傭兵の中では平均以上だが、風彪にとってはそよ風程度にすぎまい。

「なんだい。お前が寝てるからちょっと見ててもらっただけじゃねぇか」

レルガの焦りをよそに郭方はいつも通り人を食ったような態度をとる。

――喧嘩は相手を見てやれ。

自然とため息がでる。

呂盛はさすがに多少神妙にしている。少しうつむいた顔についた目の焦点は、浮いてその場をさまよっている。

風彪はなにも言わずに二人を見下ろしている。

――見下ろして？

二人と風彪との背丈はさほど変わらない。高い部類には入るが、それ以上ではない。うなだれている呂盛が小さく見えるのは分かるが、郭方まで小さく見えるのはどうしたことだろうか。

「なぁ風彪、こいつらこういうときは退屈してるから、やることが荒っぽくなっちまうんだ。これくらい大目に見てやってくれよな」

一瞬、風彪の目が光った。背筋に寒気がはしる。

しかしそれもつかの間、次に風彪が発した言葉は思いのほか穏やかだった。

「まぁ、いい。それより林昭、まだ起きてからなにも食ってないだろう。親父に頼んでなにか出してもらうといい」

林昭も雷が落ちると思っていたらしい。答えまでわずかに間があ

ったが、師匠の言葉に素直に従って勝手口をくぐった。
「さて」
林昭の背中を見送った風彪が二人のほうに向きなおった。
――今度こそやべぇな。
「俺もちょうど退屈していたところだ。郭方も呂盛も飯のあとでかまわんから相手してくれ」
――助かった。
レルガはほっと胸をなでおろした。そのくらいで済むなら安いものだ。下手をすれば真剣で立ちあうことになるのではないかとひやひやしていた。たかがあれしきのことであっても、風彪の誇りは彼の大きさゆえ常人とは比べものにならぬほど高い。何もかもが普通のものさしには収まりきらない男だった。
しかし、そこで風彪は思い出したようにつけ加えた。
「もちろんレルガもな」
今度こそレルガは凍りついた。レルガは一度風彪と対峙(たいじ)している。一歩も踏み出せず、打ちかかることすらできず、ただ相手の大きさを知らしめられるのみであった。
風彪の目の底には冷たい炎がちらついている。今度はあのときのように無傷で負かしてくれるということにはならないだろう。あばらの一本や二本は覚悟せねばならぬかもしれない。
「おう、ちょうどいいや。俺も頼もうと思ってたところだ。なんなら今からでもいいぜ」
郭方が軽口をたたく。レルガは心中で大きなため息をついた。人を見る目がなっていない。
「よろしくお願いします」
呂盛は少し頭を下げた。さすがに挑発するようなことはしない。山賊に遭ってからここにつくまで林昭につき添うことが多かったから、少しは話を聞いたのかもしれない。話半分に聞いてはいるだろうが、半分にしても相当なものである。
風彪が道をあけた。二人も食堂に入る。

「どうした、顔色が悪いぞ」
顔を覗きこんでくる。何も含むところのない真っ直ぐな目だ。
――なるようにしかならねぇか。
腹をくくった。
「なんでもねぇよ」
「心配するな、少々痛い目にはあってもらうが、動かなくしたりはせん」
「それは誰の話だ？」
「お前ら三人の話だ」
今度は本当にため息が出る。
「あいつら二人はいいが、なんで俺まで…」
そこではじめて風彪は笑みを浮かべた。
「三人でなければ俺の稽古にならん」
「おい、お前いっぺんに俺たち三人とやる気か？」
もどりかけていた風彪が振り返る。
「あたりまえだ。あまりに手ごたえがないと稽古になるまい」
そういい残してほの暗い宿の奥へと消えていった。
よほど自分の腕に自信があるのか。レルガは一対一では手も出せなかったものの自分がそれほど弱いとは思っていない。事実、風彪がくるまでレルガに買ったことがあるものはほんの二、三人だったのだ。それに郭方と呂盛が加わるなら勝ち目もあるかもしれない。
人が複数集まって戦うとき、その戦力は単純な合計になるのではない。戦い方によってそれ以上にも以下にもなる。二人とは幾度か戦場をともにしているからお互いに戦い方を知っている。合計以上の力を出せるはずだ。
――それに、負けっぱなしじゃ面子もたたねぇしな。
武器を積んだ馬車から棒をとる。通常、傭兵は自分の得物を持っているが、戦闘の際には刃が欠けたり折れたりして使いものにならなくなるということもある。
レルガ自身は刃はもちろん柄まで鋼造りの大刀を使うので滅多に

折れることはない。刃が欠けることはしばしばだが、大刀はその重量を活かして叩き斬る武器であるからさほど刃が欠けても困らない。

しかしこの、小さな兵器庫にはもう一つ重要な役割がある。

傭兵に限らず武芸者には総じて気の荒いものが多い。戦のない日が続くと退屈して、さきの郭方と呂盛のように傭兵どうし戦うことはなんら珍しいことではない。

それを真剣で行うとなれば双方にその気がなくとも不慮の事態が起こりうる。そうなれば雇い主のカルマにとっても、己の体一つを財産として世を渡る傭兵にしても大きな損害である。

棒であればその気のない限り相手を殺すことはまずない。下手をしても骨折で済む。治ってからも体の一部に不自由が残ることもよっぽどでなければ起こらない。そういうことをするのは素人で、雇うに値する力を持ったものならどこを打てば致命傷になり、どこを打てば打ち身で済むかくらい分かっているものだ。

そういうわけだからこの馬車には棒が多く積まれている。大部分は木製だが中には実戦用の鉄棒もある。もちろんこちらは今、必要ではない。

棒を軽く振ってみる。いつもかなり重量のある大刀を扱っているレルガにとって、軽い木製の棒は非常に頼りなく感じられた。どうしても力が余る。しかし一撃の速さは増す。それが不慣れな武器を使うという不利を埋める。結果として実力がそのまま現れる。レルガはそう思っている。

もう太陽は昇りきっている。午餐（ごさん・昼食）の炊煙がいたるところで上がっている。雲の少ない空に白い煙が立ちのぼる様は白樺の林にも見えた。

風彪らが戻ってきた。

「では、はじめようか」

風彪は、体と同じ長さの棒を自分のとなりに立てているだけである。棒立ちのままこちらを向いている。

「俺が一人であることを気にする必要はない。全力でかかってこ

い」
郭方も呂盛も唖然(あぜん)とした。
「おいおい、いっぺんに三人相手するつもりか？」
「いくらあなたでもそれは…」
「怪我しても知らねぇぞ」
これがほかの人間ならレルガも同じことをいうだろう。しかし、この男は尋常の器ではない。常識などあてはまるはずもない。
「本人がいい出したことだ。お前らは気にせず全力を見せてやればいい」
そういって構える。二人も心得て構えをとる。風彪はまだ棒立ちのままだ。
郭方が間を詰めにかかる。途端に、相手から発せられる気が変わった。郭方がたじろいぐ。足が止まった。
こちらはレルガを頂点に三角形をつくっている。レルガの左にいた郭方が少し飛び出したため、いびつな形をしている。右の呂盛がじりじり前進して均衡をとろうとする。
そのままで互いに睨みあう。ただ立っているだけの風彪に、まったく手を出すことができない。
不意に風彪の気が弱まった。一気に踏みこむ。
わずかに遅れて左右から二人が続いてくるのを感じる。
相手が何であるかなど、その瞬間には頭にない。ただ、持てる力のすべてを向けて立ちはだかるものを倒そうとする。　突然、前にあった人影が消えた。それがわかったのと、衝撃とともに自分の手から棒が離れるのとは同時であった。
あっという間に勝負はついた。郭方も呂盛も、一合たりとも打ち合うことなく弾かれた。何が起こったかもわからぬまま、地面に叩きつけられている。
「まったく、情けねぇったらありゃしねぇな」
三人でかかってこの様である。郭方は痛みに顔をしかめながら、今しがた自分の身に起こったことを否定しようとするかのように首

を振っている。呂盛はうずくまって唇を噛んでいる。
郭方が風彪を見上げた。
「お前、いったい何者だ？」
それとわからぬくらいの間をおいて、答えがかえる。
「風彪だ。今は、ただの武芸者だ」
――今は、な。
やはり血は争えぬものなのか。胸の内で、「風」を見ながら、これまで侮蔑にしか使わなかった言葉を、賞賛とともにつぶやいた。

その日の午後遅くになってカルマが王宮から戻った。二ヶ月のうちに失った商品を納めれば賠償金は免除されるという話になったようだ。カルマ本人は、
「まぁ、仕方ないでしょう。これくらいで済んでよかった」
とさばさばしたものだ。商人のくせに失ったものにあまり執着しない。
「時間があまりありませんから、父にも応援を頼みます。帝都へ行きましょう」
次の行き先は帝都と決まった。

第1話－5：風の片鱗（後書き）

ここまでの登場人物

風彪（ふうひゅう）：旅の武芸者。カルマが雇った傭兵の一人。

林昭（りんしょう）：風彪の弟子。

レルガ：カルマの元で護衛を統率している。得物は大刀。

郭方（かくほう）：カルマの護衛の一人。もと商人。赤い衣を身にまとい、方天戟をふるう。

呂盛（りょせい）：カルマの護衛の一人。薬師。白衣を身にまとい、方天戟をふるう。

カルマ＝カフカス：大商人。風彪、レルガらの雇い主。

第2話：帝都へ―1：船縁

オストマルクから帝都まで、副都を経由して船を使うことにした。傭兵や、荷駄を曳く馬はかなりが怪我をしていたからあまり長い距離を動かすわけにもいかない。ほとんどを安陽に帰した。

安陽はオストマルクから東へ山脈を越えたところにある、鍛冶と商業の町である。カフカス家も屋敷を置いている。刀剣の類は全て安陽から取り寄せるためである。

大陸にはほかにも鍛冶が盛んなことで有名な都市は数多くあるが、最も信用のおけるのは安陽であるからだ。ここには伝説を継ぐ職人が、今なお生きている。

今、ここにいるのはカルマを含めて七人である。レルガ、郭方、呂盛という三人の護衛は常にそばにおいている。そのほかは場所によって変わる。

カフカス家は様々な都市に拠点をおいている。それぞれに護衛を幾人か雇っている。カルマは三人を除く護衛を品物を仕入れる場所か、届ける場所に近い拠点にいる者から選ぶことにしている。その方が土地勘や些細な情報を引き出しやすいと思うからだ。

番頭のリークは三十年近くカフカス家で働いている。若いころ奴隷として売られていた彼を買って、商売を仕込んだのはカルマの父である。

まだ五十にもなっていないはずだが、髪に白いものが混じっている。口数少なく、細長い目はいつもどこか遠くを見ているようで、実に多くのものをとらえていた。　商才では足下にも及ばないと思う。彼が自分についているのは、兄弟のうちで最も商才に恵まれなかった自分に対する父の愛情だとカルマは感じていた。

残る二人は風彪と林昭。彼らは護衛でありながら、護衛ではない。むしろ道連れに近い。ただ、信はおけるうえに腕もたつ。雇ってから決して日の浅いわけでない、レルガら三人を風彪は一人で打ち負

かしている。ここにもまた、伝説は生きていた。
王圭に引き合わされて初めて見たときには、襤褸(ぼろ)をまとった二人にあまりいい印象を受けなかった。厄介な荷物を預けられそうだと思ったものだった。
川岸の、青々としげる葦の向こうに、時折小屋が見える。レーヌ川をもう半分ほど下ってきた。川幅が広いために、橋をかけられず、渡守の小屋があちこちに見られる。
薄く雲がかかる空の下を船は軽やかに進んでいく。カルマは甲板に上がって、透明な風に吹かれながら、これまでのこと、これからのことを考えている。
さすがにあれだけの大荷物をいっぺんに運ぶのは失敗だったかもしれない。オストマルクが護衛を出す、といってきたことと期日が迫っていたことから決めたのだが、軽率に過ぎた。
誤算だったのはオストマルクがつけてきた護衛の質だった。彼らは襲撃を受けると、あっという間に浮足だって、ろくに応戦もしなかった。覚悟を決めたときには、もう覆せないほどの不利に追い込まれていた。
王圭が風彪を紹介してくれていなければ、どうなっていたことか。今までは商人と鍛冶屋として持ち合ってきたが、これで借りができてしまった。物では返せない借りだ。
しかし、それでも風彪とつながりができたのは大きい。今は一兵も持たぬ身だが、秋(とき)至れば大陸に再び風を呼ぶ。それだけの力量を備えていると見た。このつながりは、自分に必ず益になる。それはカルマの、商魂というよりは人としての、勘だった。
差し当たっては失った荷のことである。直接賠償させられることは、どうにか免れたが、それでも大損には違いない。利の大きい仕事は、転べば損も大きい。今回のことは防ぎようのないことだったとはいえ、父と顔を合わせるのは気が進まなかった。
それはなにも父と自分との間に軋轢(あつれき)があるということではない。父は三男として生まれたカルマを、それこそ目に入れても痛くない

ほどにかわいがってくれた。
カルマもそれに応えようと努力したが、商売は父や二人の兄のようにうまくはいかなかった。そんな自分に父は、腕利きのリークをつけてくれてまで独立させてくれたのに、また期待を裏切ってしまった。そう思うと合わせる顔がない。だからといってほかに頼るあてがあるわけでもないので、結局は父の力を借りるしかない。
「まったく、私はつくづく商売にはむかんらしいな」
白い空を見上げて自嘲した。不運だったと自分をなぐさめてみても、忸怩たる思いを拭い去ることはできなかった。
「そうご自分を責められますな」
リークが細い目をより細め、川岸を見つめながらつぶやいた。表情の見えにくい顔だが、つきあいの長いカルマには彼が本心からそういっていることはよくわかった。
「今度のことは仕方のないこと。オズウェル様もわかって下さいます」
――そういうことではない。
どんな形であれ、父の期待に応えられなかったことに変わりはないのだ。
自然と顔がゆがむ。川面に目を落とすと、水が跳ねて袖をぬらした。

第2話―2：旧都

水面が陽光を反射して揺れる。突然、太陽に目を射抜かれて、思わず目をかばった。

レーヌ川の河口、思い思いに散らばる三角州、一つ一つにある町、その全てが一つの都市、ガルテアをつくりあげている。

そのうちで、レーヌ川の北岸を占めるのがガルテアの旧市街である。中心部の丘に建てられた、大理石の神殿は光に満ちてガルテアを見渡している。

カルマたちを乗せた船は、その北岸に向かう。船は進路を右へ右へと、とる。

南から照りつける陽（ひ）の光を受けながら、壁が、川の方までせりだしている。南側の城壁は水面から突きだすように建っている。ところどころにぽっかり口を開けた穴は、旅人を、かつては帝国の首都として、現在はその副都として栄えるガルテアの古都へといざなう。

船は暗闇をくぐる。見上げると、水門の上には錆（さ）びて赤くなった鉄格子が見える。もう百年以上使われていない。水門を閉じる歯車も、やはり錆びて動かなくなっている。

水門を抜けても、カルマはまだ水門の、重い空気を背負っていた。

――兄と会わねばならない。

ガルテアはカフカス家発祥の地。代々伝わるカフカス本家は、長兄セリンが継いでいる。歳はカルマと八つ違う。

物堅い性格で危ない橋は渡らない。確実に勝てる賭けしかしない。そのため大きな成功もしないが、失敗もしない。彼はきっと、今回の自分の失態に、いい顔はするまい。

船をおりる。かすかに潮のかおりがする。それだけこの場所は海に近い。

石に覆われた大通りをあがる。石は長い年月を経て黒ずみ、また丸みをおびている。しかし形の不揃いな畳は、その上を走る馬車を

左右に揺らしている。
立ち並ぶ商店が、黒い道の上に、いっそう黒い影をくっきり落としている。その中にたくさんの人影が混じる。その数において、大陸中を探しても、このガルテアに勝る大都市などない、そのことを見る者に納得させるだけの迫力を備えていた。
数だけではない。この、ガルテアの中心区に足を踏み入れることができるのは限られた人間のみである。暑さをしのぐ薄手の衣も、婦人が強い日差しをかわそうとさす日傘も、ここ以外では滅多に見ることができないような、最高級品である。
カルマは少々後悔した。
兄のもとをたずねてきたことではない。風彪と林昭をともなったこと、より正確には彼らにふさわしい装いをさせてこなかったことをである。
彼自身は気にかけたりしないが、この場所の住人は、このような場所にふさわしく、身分や出自、財産をひどく問題にする。
風彪も林昭も最初に見た宵よりはましな格好をしているが、せいぜいその程度でしかない。麻でできた戦袍は、戦袍と呼ぶのもはばかられる簡単なつくりのものである。落ちぶれた武芸者にしか見えない。手にしている武器も単純な棒である。
わずかに腰の剣が主の品格を主張してはいるものの、控え目につくられたその鞘にあたりを払う威風はない。
通りを行き交う人々の視線が突き刺さる。カルマは苦渋に満ちた心をひきずりながら振りかえった。
「なるほど、同じ町とはいってもこれほど違うものか」
「あたりまえだ。一昔前までここが帝都だったんだぜ」
「噂には聞いていたが。やはり百聞は一見に如かぬものだな」
いつもと変わらぬ風彪の、胸を張り、頭をあげ、それでいて傲慢に見えないその姿に己を恥じた。さすがに視線はあちらこちらへ動いているが、そこに野卑な気配は微塵(みじん)も感ぜられない。
振りかえったカルマに風彪が話をふった。

「そういえば、カルマ殿の兄御は評議員ではないのか」
「その通りですが…。よくご存知ですね。どこでそれを？」
カルマの兄はガルテア評議会員の一人である。評議会には五百年以上の歴史がある。かつてはこの大都市を動かす最高の意思決定機関であった。
カフカス家はカルマの父、オズウェルから数えて八代前から議席を持っている。ちょうど帝国が起こる直前のことである。
「なに、カフカス家ほど繁盛している商家だ。おそらく評議員を出しているはずだ。ここに家を構えているのは兄御だけのようだからな」
「今は名ばかりですが」
風彪のとなりを歩く林昭が、師匠に問いかけるような目つきを向けた。彼はもともと流賊だったというが、カルマはそれを信じきれずにいた。挙措（きょそ）に下卑（げび）たところが見あたらない。師に感化されているとすればそれまでかもしれないが。
「この町では古来、一人の王ではなく、市民の合議によって政事が行われていたのだ。今ではほとんど実権はないが、大商家どうしの争いなどには時折動くと聞く。もちろん商家のみでできているわけではないが、評議会に名を連ねているのは大陸でもそれと知られた名士ばかりだ」
林昭の顔が沈んだ。なにか腑（ふ）に落ちぬことがあると、彼はいつもそうして答えを自分の中に落ち着けようとする。
とても流賊あがりには見えない。流賊に限らず、基本的に庶民は自分で考えることがない。目上の者の言葉には諾諾（だくだく）として従い、疑問を持たぬものである。彼はその規範から外れている。
次に彼が顔をあげたとき、その口をついたのは、やはり疑問の言葉であった。
「ガルテアは、どうして帝国になったのですか？」
驚いた。あの説明からここまで思考を飛躍させることができる。林昭の言葉を間近に聞く機会の少なかったカルマは、ここで師のみ

ならず、この弟子にも異才を見た。
「なかなかやるじゃねぇか。いいとこに気がついた」
レルガにもその驚きが伝わったようである。
理屈からすれば、合議で運営される国に独裁者があらわれることはない。
「ところがな、なんにでも例外はあるってことよ」

第2話―3：ガルテア包囲

この大陸から戦火が消えなくなって久しい。
雲すらも血のように紅く染まり、風は死者の声を運び、すすり哭(な)いている。
大地を耕す農夫の顔は、黒い影に覆われている。帰らぬ子や、夫を思い忍び泣く声があたりに満ちて、景色は色を失う。
灰色の空気の中、街の雑踏も虚しく響く。
野山に聞こえるのは殺戮の鉦(かね)と断末魔の叫び。
まさしく乱は極まった。
新しい秩序が求められていた。歴史の要求は大陸の東西に二つの大国を生む。
風彪が出廬(しゅつろ)する一六二六年からおよそ二〇〇年前、一四一二年に大陸の西側で一つ目の大国は生まれる。ガルテア帝国である。

この日はあいにくの雨であった。土砂降りではない。水で薄めた墨を刷毛(はけ)で空一面に塗ればこのような色になるだろうか。しとしと雨を降らせる雲は春らしく明るい。
白い漆喰(しっくい)で塗り固められたレンガ造りの家が、道を通す隙間もないほどにひしめきあっている。晴れた昼間には鏡のように、強烈な日光を打ち返す町並みも今日は穏やかにたたずむ。
平和に見える光景のすぐとなりに危機は迫っていた。ところどころ欠けて、あるいは黒く焼け焦げた城壁の向こうには、色とりどりの旗が林立しているのが、霞んで見えた。
ガルテアは包囲されている。海に臨む市の西側にも、大河の横たわる南側にも、赤や緑の旗をなびかせた大小の船が、蟻の這(は)い出る隙間もないほどに埋め尽くしている。
平時なら軽く、心地よく感ぜられる春の雨も、今このときにはこの国の行く末を暗示するようで、とてつもなく重く思える。

壁と水に囲まれた都市の中心に、小高い丘がある。よどんで見える丘の上にガルティス神殿がたっている。

神殿に祭られているのは海と交通の神、メッサナである。神殿の奥深くに安置されているその像は、子供とも大人とも、男とも女ともいえぬ、中性的な顔つきをしている。月桂樹の葉でつくられた冠をかぶり、袖のない簡単な肌着と足首までゆったりと覆う腰布を巻き、素足をのぞかせている。

真っ直ぐに立ち上がったその右手は舟を漕ぐ櫂（かい）を握り、開いた左手は夜の闇を照らす炎をのせて天へとのびている。しかしもはや誰もかえりみなくなったその肩には、数百年という歳月が灰になって積もっていた。

かつて西方世界は多神教の世界であった。町には神殿が必ず一つはあり、そこに神がいたのだ。それは商売や豊穣を司る身近なものから、戦や国家守護まで様々であった。

しかし、大陸暦が三桁から四桁に変わるころ、変化が起こる。それまでは数ある宗教の一つに過ぎなかった、ミレナム教が勢力をのばしてきたのである。

ミレナム教は厳格な一神教で、絶対神アクフ以外の神を認めない。このミレナム教の普及によって土着の信仰のほとんどが失われてしまった。

神話は残ったが、そこにあらわれる神々はもはや信仰の対象ではなくなった。文学や芸術の分野において主題として描かれる程度のものである。

もちろん、文化は同心円状に広がってゆくものだから、辺境にはアクフ神と在来の神を並べて祀（まつ）っているようなところも見受けられるが、大商業都市、「世界の半分」とまで称されたガルテアにそれはあてはまらない。

メッサナも、そうして忘れ去られていった神の一人であった。

南にむいた入口から、神殿のうちで最も実用に供されている会議場へと続くまっすぐな回廊の、左右に立ち並ぶ大理石の円柱には浅

い溝がくっきりと浮かび、中ほどはややふくらみをおびている。
いかめしく並ぶ柱のむこう側が会議場である。もとはメッサナに祈りを捧げるものたちの控室であり、一種の談話室であったが、ミレナム教が拡がってからはガルテア評議会場として使われている。
前述のとおり、ガルテアは目下のところ、敵対するほかの商業都市を中心とする連合軍に包囲を受けている。
すでに連合軍からは降伏を勧告する使者が出された。
ガルテアの総兵力は商家の護衛などを含めて二万あまり。市内の非戦闘要員を徴発すれば五万前後といったところ。
このころのガルテア市街はレーヌ川の河口のうち、北岸のみに広がっている。点在する三角州にまで市街が膨張してゆくのは、さらにあとのことである。
一方、空白の砂地に幕舎を張り、あるいはやわらかい雨にかすむ海に船を並べている連合軍の総兵力は、なんと五十万という大軍であったとされている。
が、種々の事情を考え合わせるとこの数には誇張が含まれていると思われる。自軍を鼓舞し、敵軍を消沈させるため、兵力を実数より多く号することは日常茶飯である。連合に参加した都市や国々の規模からして、実数は二十万前後であったと考えられる。
通常、城攻には敵の三倍以上の兵力が必要とされる。この二十万という数字はそれをはるかにうわまわる。ガルテアが勝ちを得ることは万に一つもないように思われた。
さすがはガルテア、という戦をしてから降伏するならすればいい。はなから降伏というのは、後々のことを考えると損の方が大きいように思われた。

第2話－4：野心

送られてきた使者にどう返答するか、評議会では意見が分かれていた。

降伏するか、戦うか。圧倒的に不利なこの状況下で、二つの意見はほぼ同数の支持者を得ていた。

マルティン＝カフカスは主戦論を唱えている。

――一戦も交えずに降伏してしまえば、必ず相手は図に乗って無理な要求をつきつけてくる。

勝てるとは思わないが、西海の覇者といわれるガルテアの意地を見せてやらねばならない。堅固な城壁を備えたガルテアなら一日、二日で落城ということはない。さすがはガルテア、という戦をしてから降伏するならすればいい。はなから降伏というのは、後々のことを考えると損の方が大きいように思われた。

――とにかく一度は戦うことだ。

そうは思ってもなかなか口には出せない。五百人あまりの議員のいる評議会では発言の機会すら滅多にない。父の代にようやく議席を手に入れたマルティンではなおのこと、発言の機会は少ない。

議論は主に降伏派、主戦派の有力者同士で進められていく。が、それも平行線をたどるようになって久しい。早朝から開かれている評議会も、夕暮れ刻を迎えている。連合側の使者はすでに何度か返答を催促している。

「これだけ議論を尽くして決せぬとあれば致し方あるまい。票決をとりたいと思うが、各々方依存はないか」

議論は尽くされたとみたか、これ以上話し合っても無駄だと考えたか、異議を唱えるものはなかった。あまり時間もない。このあたりが潮時には違いなかった。

票決は議員全員が議場中央にある演壇に積まれている木の札を、その両側にある議長、副議長席のどちらかに置くという方式で行わ

れる。今回は議長席が降伏票、副議長席が開戦票となっている。札には特に記名などされていないが、もちろん置くところを見ていれば誰がどこに置いたかはすぐわかる。票決の途中でもどちらの票が多いか、人の動きですぐわかる。

今回はどうか。投票を待つ列のうしろの方に並んでいるマルティンには議場の中央がよく見える。列が丸い議場の丸い壁に沿ってできているからだ。

――ほぼ、同数だな。

二人降伏に投じれば、次の二人は開戦に投じ、三人降伏に投じれば、また三人が開戦票を投じる。見ている限り、優劣はまったくないように思われた。

長い列の端が、少しずつ近づいてくる。一歩ずつ、精密に彫刻がほどこされた大理石の壁に手をつきながら歩を進める。なんとなく息苦しい。じゅうたんに足を下ろすわずかな感触も、札が置かれるわずかな乾いた音も、この町の運命を左右する大きな舞台の上でふるえているようだ。

自分の番がやってきた。残り少なくなった、整然と積み上げられた札の山から一枚とりあげて、演壇の右側を下りる。副議長席に積まれた開戦を望む声は、ほとんどの議員が投票を終えたこのときも、演壇をはさんで反対側にある議長席に積まれた札と同じくらいに見えた。マルティンは、それが自分の希望的観測でないことを祈りつつ、自分の札を積んでもとの席に戻った。

結果がわかるまでに、いつもより少し時間がかかった。双方に投じられた票の数が僅差であれば、公正を期すために何度も数えなおしが行われる。まして、議題が都市の存亡をかけたとてつもなく重大な選択である。

――私たちはどうやら、歴史の岐路に立っているようだな。

歴史物語の分かれ道はいつも、日常の中にひそんでいて誰もがそれと知らずに通り過ぎてしまうものだが、現実にはそうでもないらしい。

決して長い時間ではないはずなのに、結果が出るまでにとてつもない時間がかかっているような気がする。胸がふるえる。どちらに転んでも今日この日は、歴史の大きな幕になるに違いない。それは本来予感と呼ばれる小さな感覚だったが、マルティンには疑いようのない確信のように感じられた。ガルテアの繁栄はここで終わるのか、それとも一週間ほど先延ばしになるのか。

――勝つということは、万に一つもあるまいな……

開票結果は、二七一対二六二で、開戦と決まった。

勧告拒否を連合の使者に伝えた後、評議会からこの戦の主将が選ばれる。

――まさかここまでうまくいくとはな。

クルスは主将を承認する拍手を身に浴びながら、内心ほくそ笑んでいた。

危機は野心家にとって最大の好機である。合法的に政治大権を手に入れることのできる唯一の機といっていい。まさにクルスは野心家だった。

ガルテアにある、数ある商家のひとつに彼は生まれた。家の財政は安定していて生活の心配はない、身のまわりの世話はすべて召使がしてくれる、そんな恵まれた、ただしガルテアでは当たり前の家で育った。幼いころから変わった個で、商家の息子なのに外で剣を振りまわすのが好きな、それでいて無口な、近づきにくい雰囲気のある子供だった。

近所の者たちはそんな彼を白い目で見ていた。商人は物腰がやわらかで、誰とでもうちとけて話ができなくてはつとまらない。相手に威圧感を与えるなどもってのほか。力仕事は奴隷か召使にまかせておけばいい。なんで自らすき好んで剣をとる必要があるのか、と。

最初のうちはなぜ自分が批判されるのかもわからなかった。強くなりたい。それがなぜいけないのか。まわりの大人たちは誰も答えてくれなかった。それがまた、力の希求につながっていく。

相手には事欠かなかった。家には必ず父が雇った護衛が幾人かいる。いつも彼らに相手になってくれとせがんだ。中にはもちろん雇い主の息子に武器を向けるのをためらうものもあったが、十人いれば一人か二人は子供に武術の手ほどきをしてくれるものもあった。

――坊ちゃん、腰が引けてるぜ。

からかいのむこうにある、あたたかい微笑みがうれしかった。活発に走りまわり、武術のまねごとをする末息子をかえりみる目はそこにしかなかった。

母は二人の子を連れて、そのときすでに二人の子をもうけていた父に嫁いできた。二人とも一度、自分の結婚相手を亡くしていた。互いに二度目の結婚は愛情よりもっと現実的な理由のために行われた。事業の合併である。

幸いにして現実的な要求は満たされた。愛するものを失った悲しみは消えなかったが、ともに行きづまりかけていた事業は立ち直った。二人にとってはそれでよかった。それだけでよかった。

天はそんな二人に子を授けた。愛情による結びつきの薄い二人を結び付けておくためだったのか。それもクルスがまっとうな、商人の子であれば可能だったかもしれない。しかし、生まれてきたのは二人の望みにかなうような子ではなかった。

生まれたころは何くれと世話を焼いた両親も、成長してゆくにつれて徐々に冷たくなっていった。そして、彼はますます頑なになっていった。

一人になったクルスは、十歳を過ぎたころから憑かれたように書物を読みあさるようになった。それまでは日が昇ってから暮れるまで外で棒切れを振りまわしていた子が、今度は一日中家にこもっているのである。親兄弟は驚いたが、それは彼らにとって好ましい変化だったし、皆クルスが望めばどんな書物も買い与えてくれるようになった。

そんな彼らをクルスは腹の中で笑っていたが、もうそれを表に出すことはしなかった。無口には変わりなかったが、それは賢者の沈

黙に似ていてなんら不快なところのないものになった。数年が過ぎ、クルスは読書の合間に再び剣を持つようになったが、もう誰も何もいわなかった。

兄たちは皆、早くに家を出て分家をたてた。末子ではありながら、クルスは本家を継ぐことになった。これは普通の商家なら珍しくない。評議会に議席を持つような名家であれば、本家を議席とともに長子に譲ることも多いが、そうでなければ本家だからといって付加価値はない。

クルスが家を継いだのは二十歳過ぎ、疫病のために両親を亡くしたためであった。肉親の情に恵まれなかった彼も、このときばかりは声をあげて泣いたという。それが本心からのものでないと見破れるものは一人もなかった。

彼にとって両親の死は、長い間あたためてきた野望の第一歩に過ぎなかったのだ。

家財を引き継いだクルスがまず最初に行ったのは、慈善事業だった。自分と同じように疫病で親を失った子供たちを引き取って世話をするようになった。自ら直接子供にふれる時間がそう多いわけではなく、屋敷のすみに子供たちを住まわせて、召使を多めに雇って世話させるだけのことだったが、このことは彼の評判を大いに高めた。

日に一度は必ず子供たちの顔を見てまわる。クルスはできる限り子供たちを名前で呼ぶようにした。元気にしているか。足りないものはないか。一人ずつ、何かしら声をかける。時には幼い苦悩にもつきあう。以前の彼からは考えられないような笑顔もしばしば見せた。

――安いものだ。

この散財は彼にとって二つの意味があった。ひとつは今までの悪評を払拭(ふっしょく)し、名声を高めること。もうひとつは、そうして引き取った子供らを自分に忠誠を尽くす私兵とすることである。

クルスは幼いころに抱いた望みを、ずっと捨てずにここまでの道

を歩んできた。
――強くなる。
その純粋な望みは、やがて書物と出会うことで変質する。歴史を知り、古今の英雄たちにふれるに従い、彼の望みはより大きくふくらんだ。
――この世を、わが手に。
そのために彼は自分を変えた。クルスは、力を望む多くの支配者がそうであるように、愚かではなかった。万巻の書は、天下を手に入れるのにもっともふさわしい方法を彼に授けた。
――世の者たちが、俺に従いたくなるようにすればいい。
王道を行こうというのだ。それはもっとも時を要するが、もっとも確実な方法。利口な男はこうして善行に励むようになった。
面倒を見る子の数が百を数えるようになったころ、縁談が舞いこんできた。相手はガルテアにもそれとありと知られた名家のひとつ、イゼルニア家。家中のものが驚き、そしてそれ以上に喜ぶ中で、クルスは一人、心の中でいぶかしげな目線を縁談をもたらした使者にむけていた。
商家として、クルスの家は大繁盛しているわけではない。慈善事業に手を出してもつぶれないくらいの規模で、ガルテアにあまたある大商家から見れば小さなものに過ぎない。よしんば財を成したとしても、イゼルニアは何代もつづく名家である。家格のつりあいを考えればこのようなところへ縁談をもってくるはずはないのだ。しかしどれだけ使者を問いただしても
「当主じきじきにご用命つかまつりました、間違いのあろうはずがございません」
と繰り返すばかりで、しまいには、
「そんなにこの話が気に入らぬと申されるか」
と、切りかえされる始末。らちがあかぬと見たクルスは、承諾を匂わせながら返答を保留し、使者を追い返すと、翌日自らイゼルニア邸へとおもむいた。

第2話－5：対面

季節は秋。イゼルニア邸は色とりどりに染まる。
小さな花が足もとを黄色や紫に彩り、木々は赤く燃え上がる。
青く澄みきった空を、風が吹き抜けていく。
その中を、クルスは執事に導かれて進んでいく。
目の前を、小さな花びらが横切った。
――さて、どうしたものか。
縁談を受けてからクルスはイゼルニア家の内情を時間の許す限りで調べ上げてきた。
当主、ミルト＝イゼルニアは元老院の重鎮。ガルテアの動向には彼の意向が必ず反映されているといわれている。また、元老院に付属するガルテア最高法廷の長を九年間つとめている。
身のまわりに黒い噂はたっていない。正妻を亡くして六年ほどたつが、その前にも後にも女性関係で問題を起こしたことはない。妾（めかけ）はいない。
元老院内部における抗争はうまく避けている。いくつもある派閥のすべてに知り合いをもち、影響力を行使することができる。あからさまにひとつを支持することはしない。
いうべきことは必ずいう。ミルトの口から出るとどんな言葉も真実味を帯びて聞こえる。反対意見をもっていてもなんとなく黙り込んでしまう。そういう空気をまとっている。大物どうしのいさかいを調停するのはたいていミルトだという。
司空、つまり最高法廷の長に彼が長い間とどまり続けているのもそういった彼だからこそである。司空が裁くのは法にかかわることすべて。刑事も民事もこじれたものはすべて最高法廷にもちこまれる。誰もが納得する裁定を下すには、どの集団の色にも染まらない人物が必要なのだ。
ミルトには娘が三人いる。長女と次女はすでに他家に嫁いでいる。

クルスの相手となるのは残った末娘である。深窓の令嬢という言葉にふさわしく、滅多に人前に姿を現すことはない。どの情報屋をあたっても、なにもわからなかった。

――そんなことはいい。

問題は、なぜ自分に縁談がもちかけられているのか、ということである。

イゼルニアには跡継ぎがいない。次期当主になる男子が欲しい。それは理解できる。後継ぎのない家が、あるいは跡継ぎのある家でさえも、有能な若者を養子として迎え入れ、当主の座を継がせるというのはそう珍しいことではない。

しかし、入り婿というのは聞いたことがない。

そもそも婚姻は、政治にかかわる階層の中では、感情的な理由で行われるものではない。必ず政治的な原因がからむ。敵を減らし、味方を増やすために行われる。婚姻の相手はつながりを持つことでこちらに利益があるようなものでなくてはならない。

いまのところ、クルスにそれだけの力はない。富豪には違いないが、大商人の集まるガルテアでは目立たない程度のものでしかなく、元老院に議席をもっているわけでもないので政治的な発言力もない。孤児たちの世話をするようになって、少しばかり市民に人気があるくらいのものだ。

――なぜだ？

娘に問題があって、嫁(とつ)がせることができないということは考えられる。かといって未婚のままでも外聞にかかわる。それで養子にせず縁談、婚約という形をとるということはなくはない。

わかりやすく言えば、イゼルニアの家門と引きかえにできそこないの娘を引きとってもらおうということだ。

さまざまな可能性を考え、手を尽くして調べたのだが、イゼルニアの三女については何もわからなかった。わからないというのが余計に不気味である。

執事の前で扉が開く。豪奢(ごうしゃ)なつくりだ。把手(とって)は金で獅子の顔が牙

を剥(む)いている。
重く沈んだ色の扉には、がルテアの建国神話がきざまれている。
人語を話す狼に育てられた青年が、天かける馬を得て天へ昇り、天界と魔界との戦いで功をたてて地上の王となる。彼、ガルティスが選んだ都がここガルテアの地であったという。
クルス派、神話のたぐいなどはなから信じていなかった。この世界は人間のもの。馬が空を飛んだり、竜があらわれて火をふいたりするような、おとぎ話の世界とは違うのだ。奇跡は無知からおこる。何も知らなければ、たいしたことでなくとも驚きは大きくなるのだ。そう考える彼は、この時代には稀(けう)有な、徹底した合理的精神の持ち主だった。
書斎に案内された。クルスが入ると執事は一礼して去っていった。
「クルス殿だな。わたしに直接たずねたいことがあるそうだな」
前置きがない。名家の人間には珍しい。
「司空殿におかれましては、まずこのようにご多忙のなか、わたくしのような若輩のためにこのような席をご用意くださいまして――」
いい終わらないうちに、ミルトは顔の前で軽く手をふった。
「よい」
「は――」
「わたしにそのようなまどろっこしいあいさつは無用だ。訊きたいことがあるのだろう。なんなりというてみよ。答えられることなら答えをさしあげよう」
――さて。
ここでいきなり本題に入るべきなのか。ああいっていても、名家の人間は難しい。どうでもいいことで、すぐ機嫌が悪くなる。クルスとしてはミルトが機嫌を損ねたところでどうということはないが、元老院でも大きな発言力を持つ人間に悪い印象をもたれると、これからの動きがとりにくくなる。ましてや相手はガルテア最高法廷の長だ。まだなにも持っていない自分としては、なるたけ敵はつくりたくない。

一瞬の逡巡(しゅんじゅん)。ミルトは軽く腕をくみ、黙ってこちらを見ている。
穏やかな目のなかに鋭い光が見えた。
――俺を試そうというのか。いいだろう。
心を決めた。
「ではたずねる。今回の縁談はいかなる理由によるものか、お聞かせ願いたい」
「ふむ――」
ミルトが少し視線を下げた。
「なぜ、それを知りたいと思う」
「問いに問いをもってかえされるか」
主導権をこちらで握りたい。クルスはいくぶんか強い口調で切りこんだ。
間が、あった。
「なるほど。君を甘く見ていたようだ。失礼した。しかし、やはりこれだけは聞いておきたい。わたしが答えを与えたら、君はどうするつもりだ？」
「事の次第によっては、この話、なかったことにしていただきたい」
ミルトの目があがった。視線に力がこもる。気圧(けお)されそうになる。
――ひるめば負けだ。
じっと見つめかえす。
「この、イゼルニアとの縁談を断ると？」
「納得のいかぬ事情があれば、それもやむをえません」
ミルトがふっと下をむいた。かすかにため息の音が聞こえた気がした。
「君を見こんだから、といっては納得してもらえないだろうか」
――どういうことだ。
今度はクルスが驚く番だった。もっと長い言葉が続くものだと、こみいった事情があるものだと思っていた。
――甘く見ていたのはこちらだったか。
説明になっていない。

嘘ではない。そのことは直感でわかる。しかし、答えがあまりに突飛だ。
これは庶民の縁談とはわけが違う。ガルテアでは貴族という呼称こそ使わないが、元老院議員といえば雲の上。すべてが政事にかかわる。縁談は自家の勢力圏を広げる手段。そんな世界の人間が、こんな形で縁談をもってくることがあるのか。
「腑に落ちぬようだな。無理もない」
そういってミルトは立ちあがった。いすのうしろにある窓の前に立って、外をながめる。逆光の中に、彼の輪郭が黒く浮かぶ。
「わたしは、このイゼルニア家に生まれ、なにひとつ不自由なく暮らしてきた。父祖の言葉に従い、どの派閥にもつかず、力あるものとのつながりを深め、わが一族がこれから先も続くよう力を尽くしてきた」
そこでミルトはいったん言葉をきった。窓を、枯れ葉がよこぎる。
「しかし、わたしはいつしか、そんな生活に疑問を抱くようになっていった。このまま、一族の歴史の中に埋もれていくのが嫌になった。いや、怖くなった。そう、怖くなった。何か、わたしが生きた証を残したいと思うようになった」
初秋の陽の中で、低く穏やかな声がとけていく。
「どこで？元老院？議長にでもなるか？あの腐りきった世界で生きることになんの意味がある？商売？残るのは金と商売敵だけ。芸術？そんな高等な才覚はない」
なにを伝えようというのだろうか？この話から、なにを汲(く)めと？
「わたしは考えた。その間にも、わたしの望みは大きくふくらんでいく。これからこの世に生まれるものすべてが、自分のことを知っていてほしいと思うようになった」
すこしうつむいた。影は短い。まだ正午すこしまえだ。
そういえば、リタが植えた薔薇(ばら)は咲いただろうか。リタというのは一年ほど前からクルスの屋敷に住んでいる少女だ。
どうでもいいことばかり考えてしまう。

その先を聞けば、もう戻れない。
「なにもかも退け、わたしがたどり着いたのは、天下、だった」
――そんな。
「そう、きみが望むもの」
――まさか。
「だが、わたしがそこにたどりついたとき、わたしにはそれを成し遂げるだけの時間は残されていなかった」
ミルトがふりむいた。光の加減で、顔はよく見えない。
「わたしは若いきみに、わたしの願いを託したい」
――これは。
信用する、しないという一線をはるかに越えている。ミルトは賭けに出たのだ。負ければ二度と取りかえすことのできない賭けに。
短く、長い静寂が、空間を支配する。はりつめた空気に、息が詰まりそうだ。
「わたしを選んだ根拠は？」
同じような野心を抱く者は、自分に限るまい。もっと力のある者を選ぶこともできるはず。力なき者を選ぶのは排除するのが容易だから、そうも考えられる。もっとも、これは最終確認に過ぎない。ミルトの話が本当であることは、話の大きさから却(かえ)って明白である。
ミルトは、
「私心のために私心を捨てきれなかったということだ」
と、わかりにくいことをいった。
「ガルテアを、この腐りきった国を、再びよみがえらせるためには、新しい血が必要だ」
――そうか。
天下を望む、という私心のために、ガルテアを愛する心を切り捨てられなかったということか。ミルトの望む天下はガルテアの天下でなければならず、そしてそれは累卵の危うさの上にたつような、一代限りのものであってはならないのだ。
「天下は末代まで続いてこその、天下であると」

「そうだ」
「しかし――」
クルスは言葉をさがした。まるであたりに求めた言葉があるかのように、周りを眺めまわした。
「なぜわたしを、そこまで見込んでくださる？」
ミルトが微笑んだ。
「わたしにもわからなんだ。今になってようやくわかってきた」
「は――？」
「ふふ――」
ミルトはにやけた顔のまま、壁際へ歩いていき、呼び鈴を鳴らした。
すぐにノックがあった。
「お呼びでしょうか」
執事の声だ。
「うむ、アイリーンをここへ」
「かしこまりました」
アイリーン＝イゼルニア。クルスが、相手となるイゼルニアの末娘について知っている数少ない事実のうちひとつが、名前だった。
執事が扉の前を離れると、急に二人の間から言葉が消えた。
ミルトは、人二人は座れそうな肱掛椅子に身を沈めて腕をくみ、静かな微笑みを浮かべている。真実を見抜く鋭い司空の目が、このときは穏やかで慈愛にみちた好々爺（こうこうや）のそれに見えた。
扉をたたく音が聞こえた。
「お呼びですか？お父さま」
秋の光に春の香りがまじる。冷たく、緊張した空気がやわらいだ。
「うむ、入りなさい」
落ち着いた、低い声に応えて扉が開く。
開き方が、思うより早い。
開いた扉から入ってきた娘は、淡い橙色の質素なドレスをまとっている。ドレスのすそをつまんで軽く会釈する。

アイリーンが顔を上げると、クルスの頭は真っ白になった。
――リタではないか。
いすから立ち上がったまま、会釈をかえすのも忘れてアイリーンの顔を穴が開くほど見つめていた。
「あら、もうばれてしまったみたいね。うまくばけたと思ったんだけど。さすがね、クルスさま」
彼女の声にわれにかえり、なんとか会釈をかえす。
「いったい――」
リタはいつもクルスのことを「クルスさま」と呼んでいた。
「ふふ、わたしが誰なのかは、お父さまから話してもらいましょ」

第2話－5：対面（後書き）

豪奢…ぜいたくで、はでなこと。
稀有…めったにないこと。
逡巡…ためらうこと。
累卵…卵を積み重ねること。くずれやすく、きわめて危険な状態のたとえ。
好々爺…にこにこしたやさしそうな老人。

受験も無事に終わり、ようやく帰ってきました。ＨＮも変わって心機一転。これからもよろしくお願いします。
これからは週一で更新することを目標にやっていきたいと思ってます。一応、毎週火曜日更新ということで…。
まだまだ序盤なのにサイドストーリーばっかり膨らんでしまって、まずいなぁと思ってます。それでもまだあと2回くらいはクルスの物語です。もう少しつきあってやってください。

第2話－6：嵐の前

名家の人間は、十五、六をすぎると社交界入りする。そこで他家とつながりをつくり、結婚の相手を探す。もちろんそこには親たちの、あるいは一族の当主の意向がからんでくる。そのため当人たちの思い通りに話がすすまないことも多い。そこで生まれた悲恋をとりあつかった物語も数多く存在する。

クルスはアイリーンについて調べるにあたって、彼女が社交界入りしているものと考え、その筋に詳しい情報屋をあたった。しかし、彼女のことは杳(よう)として知れなかった。

なぜか？

「アイリーンは姉たちの結婚を見て、あんな男たちと結婚したくない、といった。か弱く、優柔な名家の子息が気にいらないというのだ。そして自分で生涯の伴侶を探したいといいだした」

ミルトは、くすりと笑った。クルスは自分がどんな顔をすればいいのかわからなくなった。

「わたしはもちろん反対した。だがこの娘は生来のおてんばで、もらいてを探すのが難しいというのもまた事実だった」

「でもそれは、お父さまが招いたことよ。先生を決めたのはお父さまなんだから」

「そう。たしかに」

ミルトは微笑んでいる。

「わたしはこの娘の傅(ふ)にネイアをあてた」

ネイア＝アルトラム。イゼルニアがかかえる私兵の長。武勇にすぐれ、また剛直な人物であるという評判だ。融通がきかないということでもあるが。

「彼なら信頼できると思ってね。ところが彼はおよそ家柄というものになじまない男だ。名家らしいたしなみもなにもあったものではない。もちろんわたしもそのことは承知で教育係をもう一人用意し

たのだが、そちらはアイリーンが気にいらなかった。一応の作法はなんとか覚えてくれたが、しかしネイアの気質を受け継いで、聞き分けのない娘になってしまった」
「お父さまったら」
アイリーンがしかめっつらしてみせる。
「はは。こういう家柄にしては、ということだ。とにかくアイリーンは自分の相手は自分で決めるんだ、と譲らない。わたしも折れた。三年は待ってやろうといった。それより長びくようならわたしが相手を決める、とね」
アイリーンが割りこんだ。
「でも、天下に手のとどく英雄なんか何百年に一人でしょ。三年じゃ短すぎると思ってたのよ」
そこで言葉をきった。茶色い、くりくりした目がクルスを見つめる。それはクルスが知っている、いたずら好きなリタの目に違いなかった。
「でも、見つかったわ」
婚儀は、春と決まった。

クルスは城壁の上から外を眺めていた。
――俺が天下をとる、か。
自然と顔がゆるむ。眼下の大軍を退けなければ、今までつみあげてきたものがすべて無に帰すことになる。わかっていながら、クルスは微笑んでいた。
春の、透きとおった風が、体をなぞるようにふいていく。婚儀からもう一年になる。
負ける気が、しなかった。
頭がめまぐるしく動き出す。
すでにいくつか手は打った。もうそろそろ効果が現れてもいいころだ。

この一年の間にクルスは義父からさまざまなものを受け継ぎ、自分のものにしてきた。元老院のいす、有力な議員たちとのつながり、信頼と信用、そして名声までも。

包囲を受けてすでに二週間になる。その間に戦闘は二度。

相手は二十万の大軍だが、まったくの一枚岩ではない。五十近い小国家や都市が集まってできた連合である。互いの利害が複雑にからみあっており、一貫した指揮系統を作ることは不可能だ。そこにガルテアのつけこむ隙があった。

そもそもこうしてガルテアを包囲しているのは、ガルテアを陥(お)とせばその富を得られると考えてのこと。互いが互いをそのための手段だと認識している。できるだけ自軍の損耗(そんもう)を押さえたいと思っている。そんな軍の士気が上がるはずがない。

加えて大軍であり、こちらは寡兵(かへい)だ。この圧倒的な数の差が安心感をもたらす。緊張感がない。いつか降伏するだろう、という指揮官たちの甘い見通しが、兵士たちにも広まっていた。

しかしガルテアも、完全に団結しているわけではない。正規のガルテア軍は五師一軍。一師は兵士二千五百人からなり、一軍は五師からなる。一軍は一万二千五百。それに商家や貴族たちが護衛のためにかかえている私兵、七千あまりが加わっている。

流れる雲もなく、空は青く、穏やかに澄みきっている。ここ一週間ほど雨は降っていない。この町にしては、珍しい。

――そろそろ、動かねばなるまい。

元老院がざわついている。必ずこの包囲を打ち破ると豪語して指揮官についたクルスが、いまだになにもしていないことへのいらだちを、あらわにしつつあった。

なにもしていないはずがない。これだけの戦力差を埋めるには、それ相応の準備が必要になる。水面下で、クルスはさまざまな策を講じていた。

戦においては、情報がすべてだ。相手の位置や進路、数、構成、指揮官とその性格、地形、兵糧のありか、指揮官どうしの人間関係、

目的。相手の情報だけではない。味方についてもそれは同じ。多くを知ればそれだけ優位にたてる。これまでの二週間はその最終段階であった。それと同時に具体的な策も、いくつか実行に移してある。
隣に人影があらわれた。
「クルスさん」
「そうか。やっと着いたか」
「へい」
「いつになりそうだ」
「今日中に、報せを受けた部隊は撤退を始めるでしょうな」
相手は特に思案するでもなく、まるで雲の多い空を見て一雨ふりそうだ、とでもいうように答えた。
「そうか、助かる」
人影はいかにも恐縮したように頭を下げてみせた。
「半分は退くな」
「おそらく」
――よし。
「明日、夜半を予定している。撤退を利用して、準備を進めておけ」
今度は肩を小さくすぼめた。
「そんなものは必要ありませんがね」
口調がとげとげしい。いらぬことまでいってしまう。やはり緊張しているということだろう。
「わかっているとも。ただ、ここで失敗することは許されぬ。念には念を、な」
そういってクルスがふりかえると、もうそこに人の姿はなかった。
肩をすくめ、城壁をおりようと階段のほうへ足をむけたとき、警戒に当たっていた兵たちが声を上げた。
「敵軍、撤退を開始しました」
もうもうと砂煙を上げて、連合軍の撤退がはじまった。
「警戒を解くな。すべてが退くとはかぎらん。軽々しく動くな。次の命令をまて」

そういい残し、元老院へ向かった。

「イゼルニア公、なぜ打って出ぬ。今がそなたの申しておった好機とやらではないのか」

敵軍撤退の報はすぐに元老院にも伝わった。議員たちはここぞとばかりにクルスの無策ぶりを攻めたてる。この二週間、ここがクルスの主戦場であった。

――槍のひとつも満足にかつげない連中が。

戦を知らない議員たちは口々に不平をぶちまける。

「これ以上引き篭(こ)もっていてはガルテアの名折れぞ」

「今をおいていつ戦うのじゃ」

――それほど出たければ自分で出るがいい。

「お言葉ですが、公。城外に今どれほどの敵兵が残っているかご存知ですか？」

「数など、今は問題ではあるまい」

憮然とした顔と、情けない答えがかえってくる。

「今、城外に陣取っている敵軍は水陸あわせておよそ十万。大してこちらは多く見積もっても二万ほどにすぎません」

「だからどうしたというのだ。寡兵で大軍を破ることはよくあることであろう」

昔物語には、敵の大軍を英雄が寡兵とともに破る場面が数多く登場する。そのすべてがいつわりではなく、実際に倍する敵を相手に大勝をおさめた例はある。しかしそれが頻繁に現れるのは、それが奇異で特筆すべきことだからであって、決して大軍がしばしば敗れるからでも寡兵がいつも勝利をあげるからでもない。

みな自分がかわいいのだ。閉じこめられていると、もう生きてここから出られないのではないか、などと考えはじめる。戦時、議員たちはなにもしない。なにもできないからだ。じっとしていると、考えはどうどうめぐりをはじめる。小さな不安がある日、急に大き

な恐怖に変わる。ひどい場合、発狂するものも出る。ここにいる議員の中にはすでに連合側と通じ、ガルテア敗北後の保身を企てているものも多数ある。証拠もいくつかつかんでいる。
「では、公は今から外に出て、敵を五人打ち倒すことがおできになりますか？」
「なっ――」
相手は顔を真っ赤にして立ち上がろうとする。それを手で制し、さらに続ける。
「この真昼間、相手も警戒を強めている中でそのようなことをしようとしても、近づく前にハリネズミになってしまうだけです」
「ではどうするというのだ」
――考えもなしに口を開くな。
心に深く影を落とす嫌悪をしまいこむ。これがかれこれ二週間。クルスのいらだちも頂点に達しようとしていた。しかし今はまだ、かのものたちを打ち砕く力はない。もう少し、耐えなくてはならない。
「公をはじめ――」
議場全体を見渡す。ドーム状になった天井からは、大きなシャンデリアが議場をくまなく照らしている。声をはりあげる。
「ここにおられる方々はみな、ここまで私を信任し、この重役を任せてくださいました」
議員たちが静かになる。
「それは、これからも変わらぬものと、信じております」
すこし、声を落とした。
「ガルテアの勝利はもはや目前であります。しかし、焦りは勝利を逃すもと。もう少しだけ、待ちましょう」
連合軍の半数が撤退を開始したとはいえ、まだ十万の大軍が目の前にある。いくら寄せ集めでも、今このときに城内の軍勢が打って出ることくらいは予想している。警戒は厳しい。さらに、撤退にかかった部隊も、自分たちが城門を開けば全軍でないにしろいくらか

は兵をかえすだろう。今すぐに出ても自滅するだけだ。
「明日の朝、城門を開き、打って出ます」
乾坤一擲（けんこんいってき）の勝負だ。敗北は、許されない。
「正午までに、捷報（しょうほう）をお届けしましょう」
敗れれば、生きてここに戻ってくることはない。
「そうでないときは、方々の好きになさればよい」
――それが、ガルテアの滅ぶときだ。

第2話－6：嵐の前（後書き）

えー、先週はあと二回でサイドストーリーを終わらせるっていいましたがまだあと二回かかるかもしれません。二回にならなくても、次の一回が長くなります。下書きはあるんですが、前回の部分が下書きと大きく変わってアイリーンの設定が追加されたのでその分ふくらんでしまったもので…。

昨日の朝から突然、無線ＬＡＮを使ってインターネットに接続できなくなり、一時は有線でもダメになって、ＫＤＤＩに助けてもらって有線は復活したものの、無線は復旧しません。初期化して最初からやり直そうとしてもうまくいかない。なんでだろ…。

第2話－7：雷雲

クルスが諸将を集めたのは夜半だった。主だった指揮官たちは、さすがにみな軍人であるだけあって、眠そうな顔をしたりはしていない。それがクルスにとっては救いだった。

この二週間の間に開いた軍議は二度しかないが、クルスは彼らにそれ以外の場面でも精力的に声をかけてまわった。守城戦において敗れる危険が最も大きくなるのは内応者があるとき。特に今のガルテア軍は正規軍と傭兵の混成になっている。互いに反目しあって一方が敵に通じることも考えられる。兵力は限られているから内応者が出てから処断するわけにはいかない。裏切りを防ぐため、打つべき手はすべて打たねばならない。

――ようやくここまできた。

日のある間に連合軍はもとの半分にまで減った。陸軍が八万、水軍が二万。合計十万。それでもまだガルテアの五倍にもなる。

水軍が大幅に減ったため、連合軍はガルテアの南側にある水門を突破することをあきらめ、陸上の部隊は平地の続く東側に移った。水軍はガルテアからの船が外海へ出られないよう、西側に船を浮かべて包囲を続けている。

ガルテアは大陸を縦横に貫く央岳から西へ流れ出るレーヌ河の河口にある。レーヌはいくつもの支流と合流しながら海へと向かい、また最後に無数の支流にわかれて海にそそぐ。海にそそぐ支流のうちで最も北にあるものは特にルースと呼ばれる。川幅が広く、海を渡る大型の船も出入りすることができる。ガルテアはルース川とその北にある山地との間のわずかな平地につくられている。西は海、南は川、北は山に囲まれたガルテアはまさに要塞。以下に大軍であっても力ずくで攻めるのは難しい。

連合軍はこれまで、北をのぞく三方を包囲してガルテアをしめつけてきた。

「クルス殿、夜襲か」
ネイアだ。アイリーンの傅。イゼルニアの私兵隊長。クルスの腹心であり、その野心を知る数少ない人物。もとは軍人であったというが、過去については多くを語らなかった。指揮官としての力量は申しぶんない。今、彼の麾下は三百ほどでしかないが、千や万の部隊を指揮させても力を見せるだろう。
「まさしく」
どよめきがおこる。彼らもまた打って出るときを待っていた。
「三面の包囲のうち、一面は解かれた。連合は東西に陣を張っているが、西の水軍は中心となっていたキーリックを失って士気は低い。陸上の部隊を破ればおのずと撤退しよう。したがって西側には最小限の守備を残し、東側に戦力を集める」
守備に残る部隊を読みあげる。
「以上をのぞき、全部隊は二刻（一時間）後、東門に集合とする」
諸将に依存はない。すぐ出撃の準備に入った。
幕舎を出ると、暗がりの中から男が一人、近づいてきた。
「万事ととのいましたな、旦那」
「二刻後だ」
相手がかすかに笑う。
「へへ、みんな聞いとりましたよ」
大きな溜息が出る。
「ほかには誰も聞いてはおるまいな」
暗に敵の間諜のことを、そして議員子飼いの間者を指している。気取られれば、ここまでつみあげてきたものがすべて水泡に帰す。
「ねずみはなん匹かおりましたがね、いたちがみんな食っちまいましたよ」
「そうか、ならいい」
しばらく無言で歩いた。
「貴様が敵だったらと思うと、ぞっとする」
「あっしも、旦那をむこうにして仕事をするなんざ、ごめんですぜ」

失笑した。
「よくいう」
自分も彼らのことは、よく知らない。この男の名前すらも知らない。
闇に生きる一族。諜報、秘密工作から暗殺まで、なんでもこなす。ところが金さえ払えばなんでもしてくれるのかというと、そうでもない。彼らには彼らの信義があるようで、仕事の内容によっては断ることもある。主を変えたりもしない。
「あちらさんはみんなよくおやすみです。詰めを誤ったりしなさんなよ」
「わかっている。いやというほどな」
それを最後に男は離れていった。
――いよいよか。
体が、ふるえる。気にするまいと思い、いくら打ち消そうとしても、不安はぬぐえない。実に五倍もの敵を退けなくてはならないのだ。
――このくらいでちょうどいい。
こういうとき、不安から逃げようとしないことだ。不安は不安として、そこにある。それでいい。必要なのは、冷静に自分を見つめる目と、ごくわずかな一瞬をつかみ、一歩踏み出す力だ。
すでに麾下の二百は集めてある。ネイアが指揮する三百騎とともにクルスの命に忠実に従う、いわば親衛隊。今までに面倒を見た孤児たちや、腕利きの傭兵たちからなっている。
「みな揃っているな」
得物はまちまちだ。それぞれが得意なものを持っている。多くは槍や矛、戟（げき）だが、なかには長柄の先に斧の刃をとりつけた戦斧を扱うものや、鞭（べん）を使うものもある。
雇い入れた武芸者たちはそれぞれが得意とする得物の扱いを子供たちに教える。そこで生まれた師弟のつながりが、本来は流れ者であるはずの彼らを引き止める鎖となるのだ。

東門へ足をむける。全員が騎馬だ。馬はクルスが自ら出向いて買いつけた、駿馬ばかりだ。
普段は夜半ですらごったがえして足の踏み場もない大通りもこのときばかりは闇の中に沈み、人の姿はどこにもなかった。兵がもつ炬火（きょか）の明かりだけが、ぼんやりと浮かんでいる。それも、吹けば消えてしまいそうで、不安に体が押しつぶされるような錯覚に襲われる。
暗がりは、人を不安にさせる。恐怖を生む。その恐怖から逃れるために、人は火を生み出した。
城門には、まだどの部隊も来ていない。そこに設けられた広場に、たった二百騎が集まっている。明かりはもっとも近い建物まですらも届かない。自分たちがいるところをはっきり見せてくれるのは、人が五十人並んで通れるだけの幅がある、この城門だけだった。
ときどき、月のわずかな光が影をつくる。あと三日で新月だ。クルスは空を見上げた。風に流される雲が、気まぐれに月のまわりを踊っている。
まわりを見渡すと、少しずつ炬火が増えていく。広場は少しずつ光に満ちていく。空からはどのように見えるのだろうか。またクルスは空を見上げた。
月は、厚い雲に隠されて、見えなくなった。
――吉か、凶か。
ここにきて、まだ不安をかかえる自分があった。
「月が消えましたな」
ネイアが馬を寄せてきていった。
「これでむこうから、こちらの姿は見えますまい」
「そうだな」
――消えた月は、やつらの命運か。
吉凶とは不思議なもの。月が雲のむこうに隠れたとき、クルスにはそれが自分の行く末のように思われた。しかしネイアのなにげない一言が、月が消えるというひとつの事象の禍福を逆転させた。ク

ルスにはそう感じられた。
軍吏が走ってきた。
「全軍、揃いました」
――勝ちにいく。
「よし」
深く息を吸いこむ。春のやわらかな気が、体を満たす。
「炬火を消せ。出撃する」
自分の近くから順々に明かりが消えていく。城門の両脇にある衛兵の詰所を除き、すべての明かりが消えると、それを合図に城門が開き始めた。
ゆっくりと、音を立てぬように門が開かれていく。かすかに目標とする明かりが漆黒の中に浮かび上がって見える。
そろり、と馬を進める。
一瞬、あたりが真昼のように明るくなった。クルスの目が敵陣を捉えた。
次の瞬間、耳を割らんばかりの轟音が当たりに響き渡った。
――雷か。
「雨だ」
誰かが叫んでいる。空から大粒の雨が、すべてを沈めようとするかのような勢いで降りそそぐ。敵陣の明かりも流されて消えていく。
――まさしく、好機。
この雨で、音も姿も相手の耳目から隠される。
「天はわれらに味方せり。いざ、進め」
槍を突き上げ、全身から声を上げる。全軍が呼応し、喚声(かんせい)が湧きあがる。
ガルテアの軍勢は、目に見えぬ雷光となって駆け出した。

第2話－7：雷雲（後書き）

傅（ふ）…ぴたりとそばについている補導役。おもり役。
麾下（きか）…ある人の指揮のもとにあること。また、そのもの。部下。
戟（げき）…戈（か）と矛を組み合わせた武器。
戈（か）…柄の上端に直角に刃部をつけ、打ち込んで引き切ったもの。
炬火（きょか）…たいまつ。かがり火。

第2話－8：表裏

苦労して集めた兵の半数が帰国してしまった。

連合軍の盟主、アテルイの市長は舌打ちをくりかえしていた。

これまでの準備にぬかりはないはずだった。水面下で少しずつガルテアに与(くみ)する都市を切り崩した。政争の外に身をおいていた国も味方に引き入れた。ときには相手に利を与え、またあるときには恫喝(どうかつ)に等しいことも行った。そうしてガルテアまでの距離が五舎までのほぼすべての勢力から参戦の約定を取りつけた。一舎は軍が通常の行軍速度で一日に移動できる距離である。

唯一の例外は、内陸のラムカーン王国だった。この強大な軍事国家は一都市を盟主とするこの連合に参加することを拒んだのだ。そこでこの王国には多額の賂(まいない)を贈り、戦勝後の交易における優遇を約すことで不可侵、不干渉を認めさせた。連合軍の中にはラムカーンと境を接し、その脅威にさらされている国や都市が数多くある。ラムカーンから不可侵の約定を取りつけることは、彼らを参戦させるためにどうしても必要だった。

それにもかかわらず今朝、ほうぼうの陣に本国からの伝令がやってきて報告した。

「ラムカーン、出兵」

「至急、帰国されたし」

市長は必死になって諸侯を説きふせようとした。ガルテアの落城は目前。いま総攻撃を行えば、すぐにでも攻略できる。本国を救援するのはそれからでも遅くない、と。

しかし彼らは猜疑(さいぎ)の顔を向けるばかり。すぐにでも攻略できるなら、なぜいままでじっとしていたのか、と逆にかみついてくる。

状況が違う、と市長は叫びたかった。ラムカーンは出てこないはずだったのだ。だからいくら時間がかかろうとも犠牲を最小限に抑えるために持久戦を選んだのだ。それは諸侯の意思でもあったはず

なのだ。誰もが楽をしたいと望み、そのとおりにしたのだ。
連合に加わったものたちは、ラムカーンが出てこないことを前提にこの連合に参加している。その前提が崩れたいま、連合の一員としてはたらく義務は失われた、と考えている。
両者の溝はいっこうに埋まらなかった。それどころか議論が長引くにつれて感情的になり、ますます広がるばかりである。さらにはアテルイの将までが、ラムカーンが動いたとあってはアテルイも危うい、いっそガルテアと和議を結び、連合をあげてラムカーンにあたるべし、などといいだした。
帰るところがなくなってしまうとまでいわれると、反論の言葉を見つけることはできなかった。アテルイはほかの都市や国を隔ててラムカーンとむかいあっている。唇亡びて歯寒し、という。それらの都市や国がラムカーンの手に落ちればアテルイもただではすまない。
しかしここまできてガルテアをあきらめることもできない。市長は折衷（せっちゅう）案を示した。連合の半数は帰国してラムカーンの防ぎに当たり、残りの半数でガルテアを攻撃するのだ。
落としどころを探っていた諸侯もこの案に同意した。内陸国のラムカーンにまず狙われるのは海港であると思われたため水軍のほとんどを帰国させ、陸上の部隊をガルテアに残すこととなった。
日が中天をすぎたころから撤退が始まった。これに乗じて城内の兵が打って出るやもしれぬと警戒はしたが、ガルテア城はそれまでと同じように不気味に静まりかえっているばかりであった。
それは勝ちを信じて疑わない市長の目には、おびえ、すくんでいる姿にしか見えなかった。
総攻撃は明朝と決まった。
市長はいま、自分の幕舎で酒盃を片手に、穏やかにゆれる明かりを見つめながら、後悔を重ねていた。彼が描いた絵図の中では、一度か二度の攻撃でガルテアは視界を埋めつくす二十万の大軍に屈するはずだった。このようなことになるなら、もっと前に総攻撃をか

けるべきだった。
まだ、手許(てもと)には十万の兵が残っている。攻城戦に必要とされる兵力は通常、相手の三倍。依然として自分が優位にあることに変わりはない。そういって、市長は自らをなぐさめた。
それからほどなくして、彼は眠りに落ちた。滝のごとくたたきつける雨の音にも、幕舎に入りこんだ人影にも、酩酊(めいてい)した市長は目を覚ますことはなかった。

ガルテアは、大勝をあげた。
連合はアテルイの市長をはじめ、主だった部将のほとんどを捕らえられ、兵のおよそ三分の一を失った。ガルテア包囲は、崩壊した。
クルスはその公により、ガルテア正規軍の元帥、司馬に任命された。包囲戦における彼の立場はあくまで臨時の指揮官だったのだが、これによりクルスは一万二千五百の兵を自分の手足とすることとなった。
さらに捕らえた部将たちと盟(ちか)いを結ぶと、彼らとともにラムカーンを撃退すべく進発した。
ラムカーンは諸侯の予想に反して内陸の都市や国に兵馬をむけた。これらの都市では包囲戦に参加していた兵の帰還がなく空同然の状態であり、アテルイを含む十二の都市が陥落した。これに対しクルスはまず連合の盟主であったアテルイに三日三晩、火の出るような猛攻を加え、城門を破壊して攻略したのを皮切りに、十二の都市すべてを三ヶ月で奪回した。
これによりガルテアは包囲からほぼ四ヶ月で自らを包囲した二十万の軍勢に号令をかけることとなった。
一つ一つの国家に異なった義務や権利を与えて同盟を結ぶことで支配下にある国家が結束してガルテアに反抗するのを防ぐ、いわゆる分割統治の方式をとり、大陸西部のおよそ五分の一を支配した。
クルスはガルテア内においてもその多大な功績を認められ、要職のほとんどを兼任することとなり、さらに元老院から元首として認

められた。名実ともに彼はガルテアの頂点に立つこととなったのだ。
大権をクルスに与えた元老院の力はそれから少しずつそがれていった。そしてクルスの孫、ゼルク＝イゼルニアをガルテア皇帝に選出し、時代から退いた。

「――これが表むきだ」
ガルテアを離れる船の上で、林昭は帝国のはじまりを聞いていた。
潮風が、かもめの鳴く声が、新鮮だ。
海を見るのは、はじめてだ。林昭は山で育った。両親とともにあったときも、両親を奪ったものたちとともにあったときも。
陽がまぶしい。
カルマの兄、セリンは商用で不在だった。それを聞いたカルマの顔が、わずかにほっとしたようにゆるんだのを林昭は覚えている。
一行はそれからカフカス邸で一泊し、翌朝一番の船で帝国の首都グランゼルへ出立した。
ときどき自分がこうして陽の下にいられることが信じられなくなる。目を覚ますとあの薄暗い穴ぐらに戻っているのではないか、と不安に襲われることもある。
が、いまはそんな心配をする必要はない。むしろ明るすぎるくらいだ。
「しかし本当は――」
風彪の話は続く。
「すべてクルスが仕組んだものだった。ラムカーンの出兵、諸侯の予想を裏切るアテルイの陥落、そしてその奪還とそれに続く快進撃。全部クルスにとっては予定通りだった。包囲線で連合の部将を捕らえたのも、ラムカーンに出兵をそそのかしたのも、アテルイの城門を破壊したのも、みなクルスの手のものではないかといわれている」
「証拠はなにもないんだがな」
レルガもとなりで聞いていて、時々こうして口をはさむ。

「しかし、どんな名将でも三ヶ月で十二城も陥(お)とすのは不可能だ」
風彪は少し言葉を選んでいるそぶりを見せた。
「奇術でも使わないかぎりはな」

船は帆をゆらしながらゆっくりと北へむかって進んでいく。あまり沖へ出ると海流があって南に流されてしまうから、岸が右手に見えるくらいのところを進むのだと船長が教えてくれた。
海流、といわれても林昭にはなんのことかわからない。海の水が流れる道のことだという。高低の差もないのに水の流れができたりするのだろうか。
頭をかかえていると、そばでたるにもたれていたレルガがいった。
「空気のなかで風があるだろう」
そういわれてみればそうだ。
「じゃあどうして風が吹くんですか」
「さあな。俺もそこまでは知らねぇな」
――風、か。
自分のこれからは、たぶん風とともにある。
船の舳先(へさき)に目をやると、師はそこに立って何かを見つめていた。

第2話－8：表裏（後書き）

火曜日にバイトが入ったので、もしかしたら更新する曜日が変わるかもしれません。大学の様子がわからないとなんともいえませんが…。

与（くみ）する…賛成して仲間となる。味方する。力をかす。
恫喝（どうかつ）…おどして恐れさせること。
猜疑（さいぎ）…人をそねみうたがうこと。
酩酊（めいてい）…ひどく酒に酔うこと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1352c/

風雲の果て

2010年10月10日19時10分発行